

西楽寺の年頭行事

年のはじめには様々な行事が行われます。

その年の幸福を祈る儀礼や、

年のはじめに人間関係(上下関係など)を確認する儀礼など、

その社会にとっての最重要事項が、年頭の行事で確認されます。

袋井市春岡に鎮座する古刹、安養山西楽寺には、

市内最大規模の古文書群が残されています。

今回は、西楽寺文書を題材に、西楽寺の年頭行事をご紹介します。

その中で、特に年頭の挨拶を取り上げます。

年頭の挨拶は、言わずもがな、人と人が出会う年中行事です。

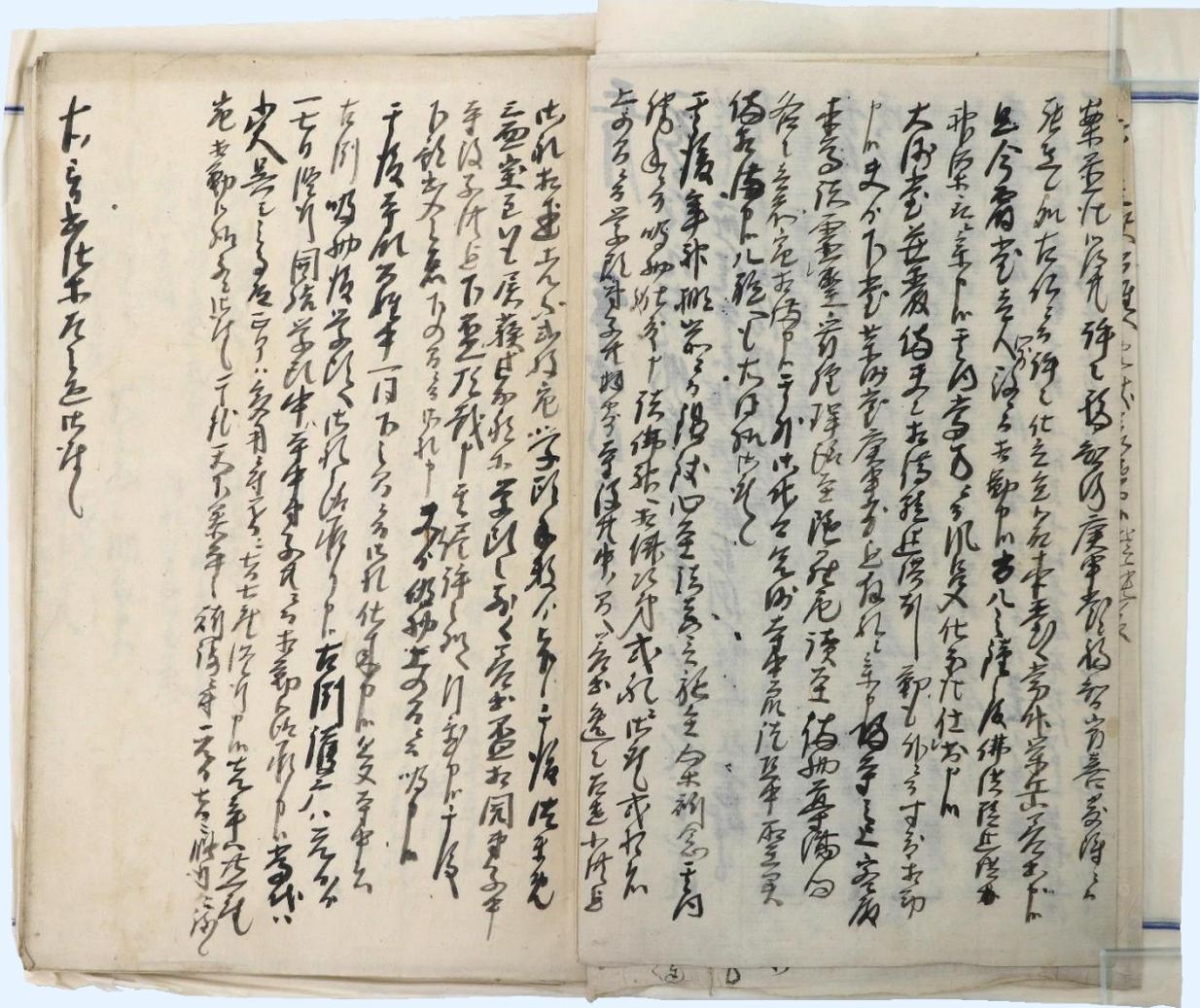
西楽寺文書を見ると、西楽寺一山内部のみならず、近隣のお寺や門前の人々、そして江戸城など、想像以上に幅広い交流がお正月に行われていたことが分かります。

正月の行事という視点から広がる歴史を感じていただけたらと思います。

袋井市歴史文化館ミニ展示「お正月の歴史学」

令和7年1月6日(月)～1月31日(金)

西楽寺の年始の挨拶



『年中行事扣』（西楽寺文書近世 1686）

正月元日条。上之間、下之間での年頭の挨拶に関する記事（文字起しは次ページに掲載）。

西楽寺の年中行事を記した『年中行事扣』（西楽寺文書近世一六八六）という史料があります。

現在の形態は縦帳で、大きさは縦 259mm×横 179mm×厚 6mm です。表紙と裏表紙に罫紙が使われていますが、これは元の姿ではありません。

もともとあった縦帳（縦 240mm×横 160mm）の上から、「静岡県袋井市立山梨高等家政学校」と印刷された罫紙を、表紙・裏表紙に重ねる形で、針金によつて綴じています。誰かが西楽寺文書を調査した時に、紙の状態が悪いからと罫紙を上から綴じたのでしょう。皆さまは絶対にマネしないでください。

表紙には、「梅本坊榮運記」之／弘化四年正月吉旦／年中行事扣□□（「年中行事扣」の下の細字部分は判読困難です）とあります。弘化四年（一八四七）正月に、榮運房有盛が記したもので、このことです。有盛は、西楽寺住職有海の弟子で天保九年（一八三八）四月三日に印可、その翌年天保十年（一八三九）二月十五日に梅本坊住職になり、嘉永三年（一八五〇）二月一日に西楽寺十九世住職となった人物です。なお、弘化四年当時の西楽寺住職は榮岳という人物です。『年中行事扣』にも、「今の住職」として名前がよく登場します。

『年中行事扣』は、正月元日から十二月二十九日までの年中行事を書いたものです。

段々月が進むにつれて、年中行事の数が減っていきますが、これは、段々書くのが面倒になった、という訳ではなく、毎月同じ日に行っている行事は、正

月などで初めて登場したら、後は毎月同じ、とだけ書いて省略しているからです。そのため、実際にはもつと多くの行事が行われていました。

では、『年中行事扣』正月元日条にある、年頭の挨拶に関する記述を見てみましょう。場面は、年神棚の前で祈念するところからです。

(前略)

其後年神棚前^ニ錫杖心経法、真言経向等祈念。

其内勝手^ニ而食物仕度申、諸仏神へ相供次第式礼

御座候。式礼者上の間^ニ而学頭・弟子共相寄、寺

役共中ノ間へ差出、逸と相召小供迄^ニ御礼相述、

こんふ式枚宛学頭手数方被下候。其後さらめ

三面宝主以上屠蘇さかな等学頭之前へ差出、盃

相開、弟子中・寺役・子供迄下盃頂戴申、其俣

許之処へ行置申候。其後下部出入之者下の間^ニ而

御礼申。夫方吸物上の間^ニ而吸申候。

其後寺領百姓中一同下之間^ニ而御礼仕来申候。

且又寺中者古例吸物後学頭へ御礼之趣承り申候。

古例護摩ハ元日方一七日修行開始、学頭中ハ寺

中弟子共^ニ而相勤候趣承申候。(後略)

〔現代語訳〕

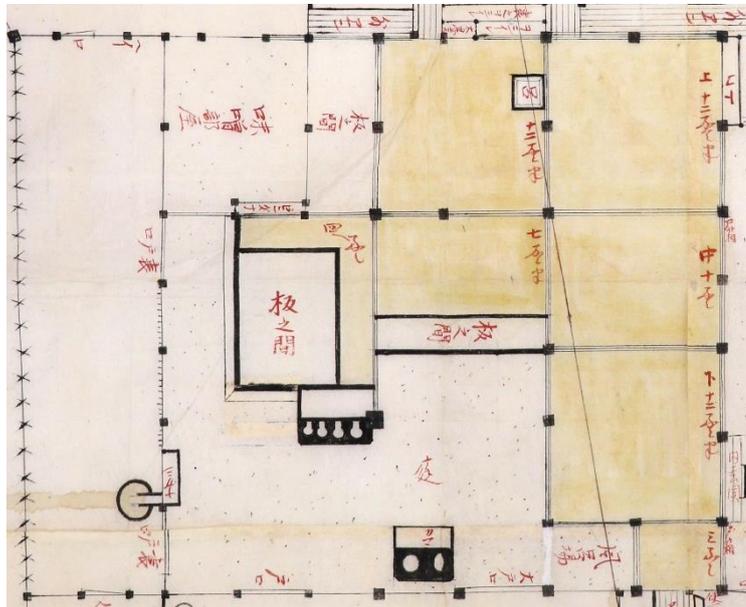
その後、年神棚前にて錫杖心経法、真言経を祈念。その内に、勝手(厨)の方で食物の仕度をする。諸仏神へ供える次第は、式礼にあり。

式礼によれば、上の間に学頭・弟子共らで集まり、寺役共は中の間へ集め、逸々(?)子どもまで召して御礼を述べる。昆布二枚ずつを、学頭手ずから下す。その後、さらめ、三面宝主以上は屠蘇、さかな(肴)などを学頭の前へ差

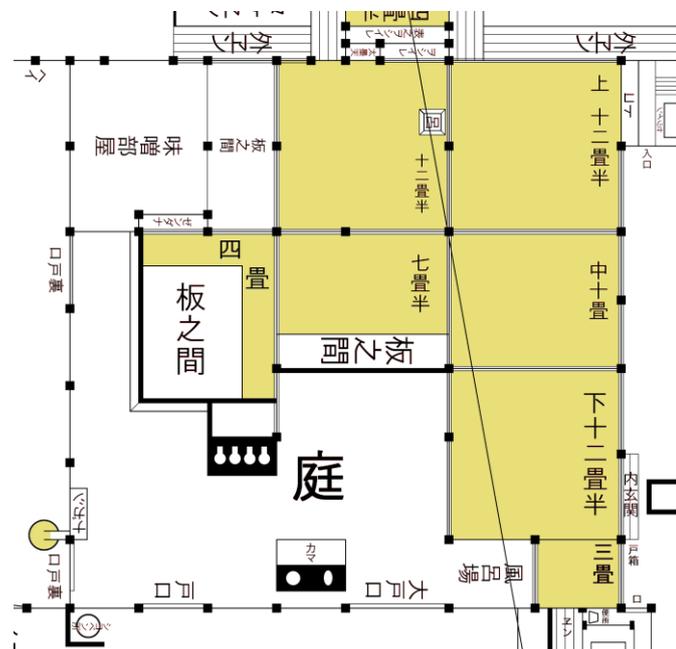
し出し、盃を開ける。弟子中・寺役・子どもまで、学頭から盃を頂戴する。そのままのところへ行く。その後、下部、出入の者は、下の間で御礼を申し上げる。それから吸い物を上の間で吸う。その後寺領百姓中一同が下の間に御礼をする。且又、寺中は、古例によれば、吸い物の後学頭へ御礼。

その後寺領の百姓一同は下の間で御礼をするしきたり。かつまた寺中の者は、古例では吸い物の後学頭へ御礼すること。古例では、護摩は元日より七日修行開始。学頭は寺中の弟子とともに勤めるとのこと。

年神棚前で祈念している間に、勝手に食物の仕度



「先般有様之図」(部分/北が上) 下に文字起しを掲載



【先般有様之図横写】

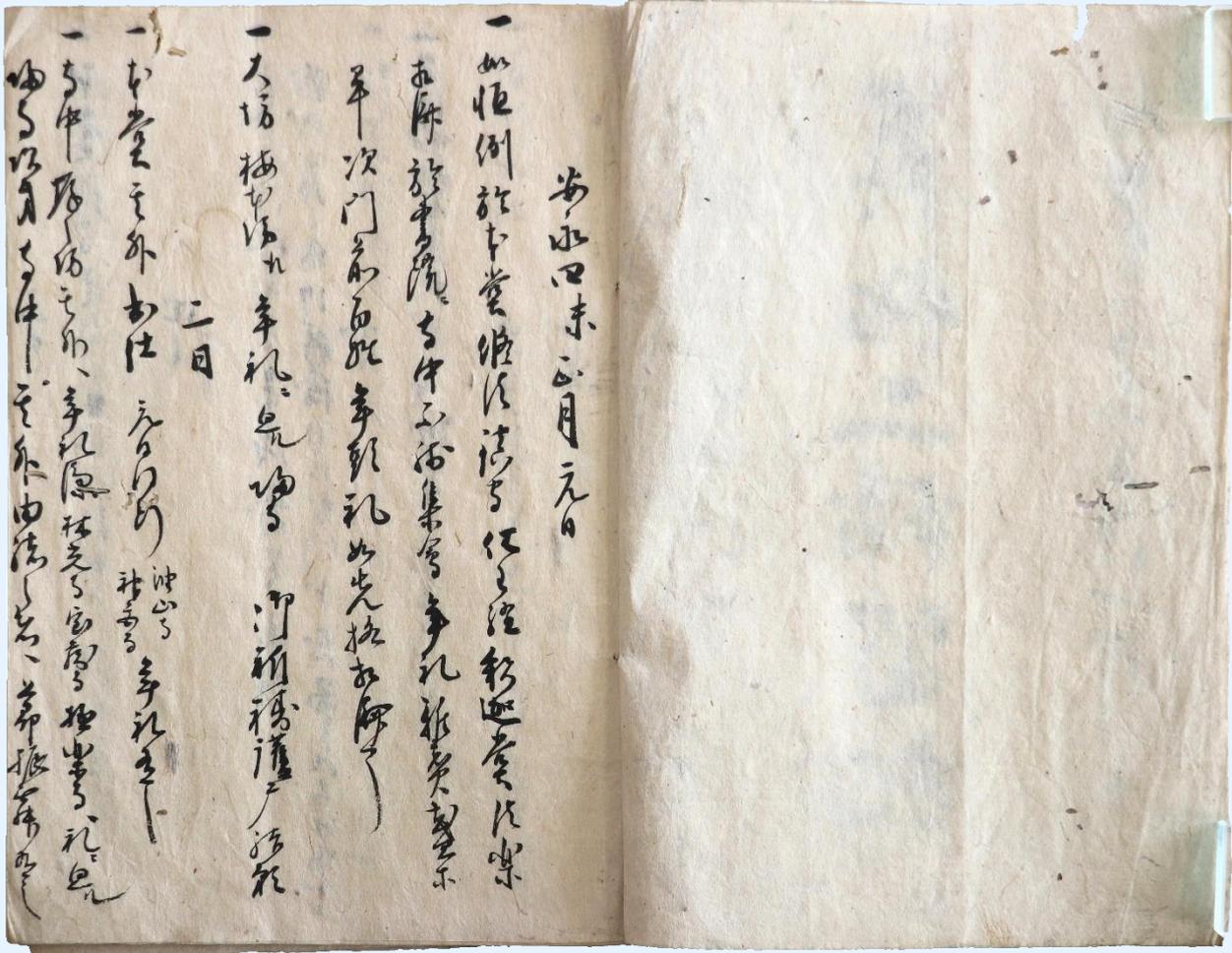
をする、とのこと。

『年中行事扣』正月元日条では、勝手の記事に続き、席次によって、「上の間」「中ノ間」「下の間」にそれぞれ着き、学頭(西楽寺住職とほぼ同義と思われる)に年頭の挨拶をしています。

有盛が、安政東海地震の後に、修理のため、震災直前の学頭坊の間取を書いた「先般有様之図」(西楽寺文書近世三三六四―三)を見ると、西側の建物(現存していません)の「内玄関」を入ってすぐに「下十二畳半」があり、そこから北へ向かって、順に、「中十畳」、「上十二畳半」と続いています。

この三つの部屋が、『年中行事扣』元日条に登場する、上中下三つの部屋の事だと思えます。

西楽寺の年始の挨拶 実際の例



『真俗二諦留記』（西楽寺文書近世 971）安永4年（1775）正月元日～2日条

安永4年（1775）の、西楽寺業務日誌とも言える史料。

今見てきた『年中行事扣』は、年中行事について説明した儀式書でした。実際には、どのような動きをしていたのでしょうか。

実際の例が見られる史料の一つが、安永四年（一七七五）『真俗二諦留記』（西楽寺文書近世九七一）です。こちらは、安永四年（一七七五）の西楽寺業務日誌のようなものです。その、年頭の記事をいくらかまとめてご紹介します。

安永四未正月元日

一、如恒例^ニ於^ニ本堂^ニ修法。鎮守仁王經、釈迦堂法樂相濟。於^ニ書院^ニ寺中^ニ殘集會、年礼、雜煮、盞等畢、次門前百姓年頭礼如^ニ先格^ニ相濟了。

一、大坊・梅本坊^江年礼^ニ廻^ル。歸寺。御祈禱護摩結願。

二日

一、本堂其外出仕。元日同断。油山寺 神宮寺年礼有^レ之。

一、寺中岸之坊其外^ハ年礼済。林光寺、宝蔵寺、極樂寺^ニ礼^ニ廻^ル。

歸寺次第寺中其外由緒之者^ハ節振舞有^レ之。

三日

一、本堂鎮守其外出仕同断。

四日

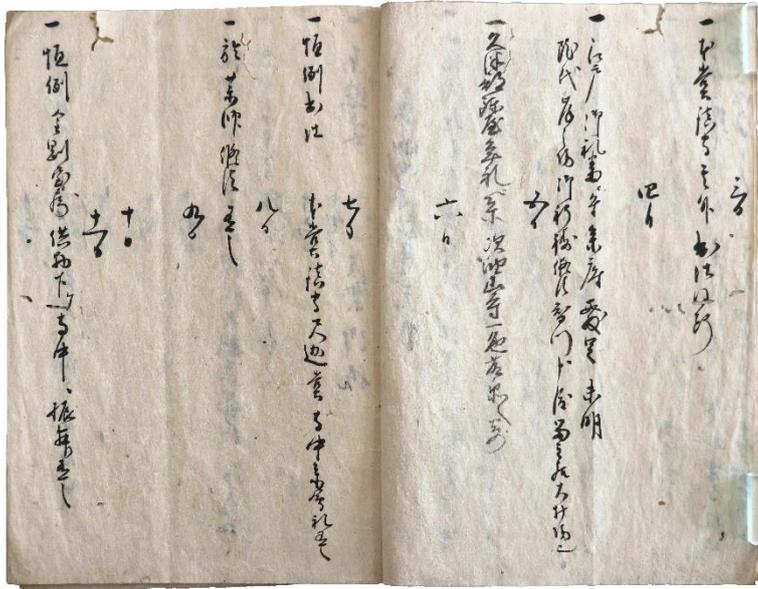
一、江戸御礼番ニ付参府。 発足。 未明。 院
代岸之坊、御祈祷修行智門へ申渡。 留守居
大井坊也。

五日

一、久津部陣屋年礼ニ参。 次油山寺一色藤兵衛
へ寄。

(後略)

元日には、西楽寺内で年礼をした後、門前百姓が
来て年頭礼を行った、とのこと。その後、住職



『真俗二諦留記』(西楽寺文書近世971) 正月3日~5日条

は塔頭の大坊、梅本坊へ挨拶に回りました。

正月二日には油山寺・神宮寺(磐田の方にあつた
末寺です)の年礼(向こうから西楽寺に来たのでし
よう)。その後住職は塔頭の岸之坊その他に挨拶に行
き、そのまま近所の林光寺、宝蔵寺、極楽寺へ挨
拶に行きました。

正月四日には、江戸御礼番が当たっている年だつ
たので参府。「院代岸之坊」とあり、学頭が江戸に行
っている間は、塔頭岸之坊の住職が学頭の代理を務
めていたようです。この他、留守居に大井坊(大坊)
住職が残っていました。

正月五日には、久津部の陣屋へ年礼に行っていま
す。これは、院代の岸之坊か、留守居の大坊住職が
行ったのでしょうか。

ここで少し、『年中行事扣』(西楽寺文書近世一六
八六)正月五日条を参照しておきます。

正月五日は、近世西楽寺では、「五ヶ年目」に当ら
ない年には、久津部の陣屋に年頭の挨拶と年玉に行
っていました。

五日。 五ヶ年目ハ公儀御年頭出府ニ付、乍席江
戸屋敷へ進納調。

今朝久津部陣屋へ■年頭使僧ニ而仕来申落付者
宿屋へ参、夫方宿屋案内ニ而陣屋へ参申候。宿屋へ
年玉物茶札付木青銅式十疋差遣申候。此度出来
次第、陣屋へ参年玉物ハ殿へ護摩木札^{台なし}三本入扇子
箱台付進上。代官両人式本入扇子箱台なし、紙
札付木茶進上候。且陣屋玄関へ通、代官■向
合ニ而相居申候。口上者西楽寺使僧年頭御礼申上、

并例年之通呈上物進上仕、宜御披露被^レ下候様
申上候。代官挨拶ハ例年之通御進物帳面ニ印置
■、江戸表へ披露可^レ申段挨拶。其後引取申、代
官敷台迄見送御座候。(後略)

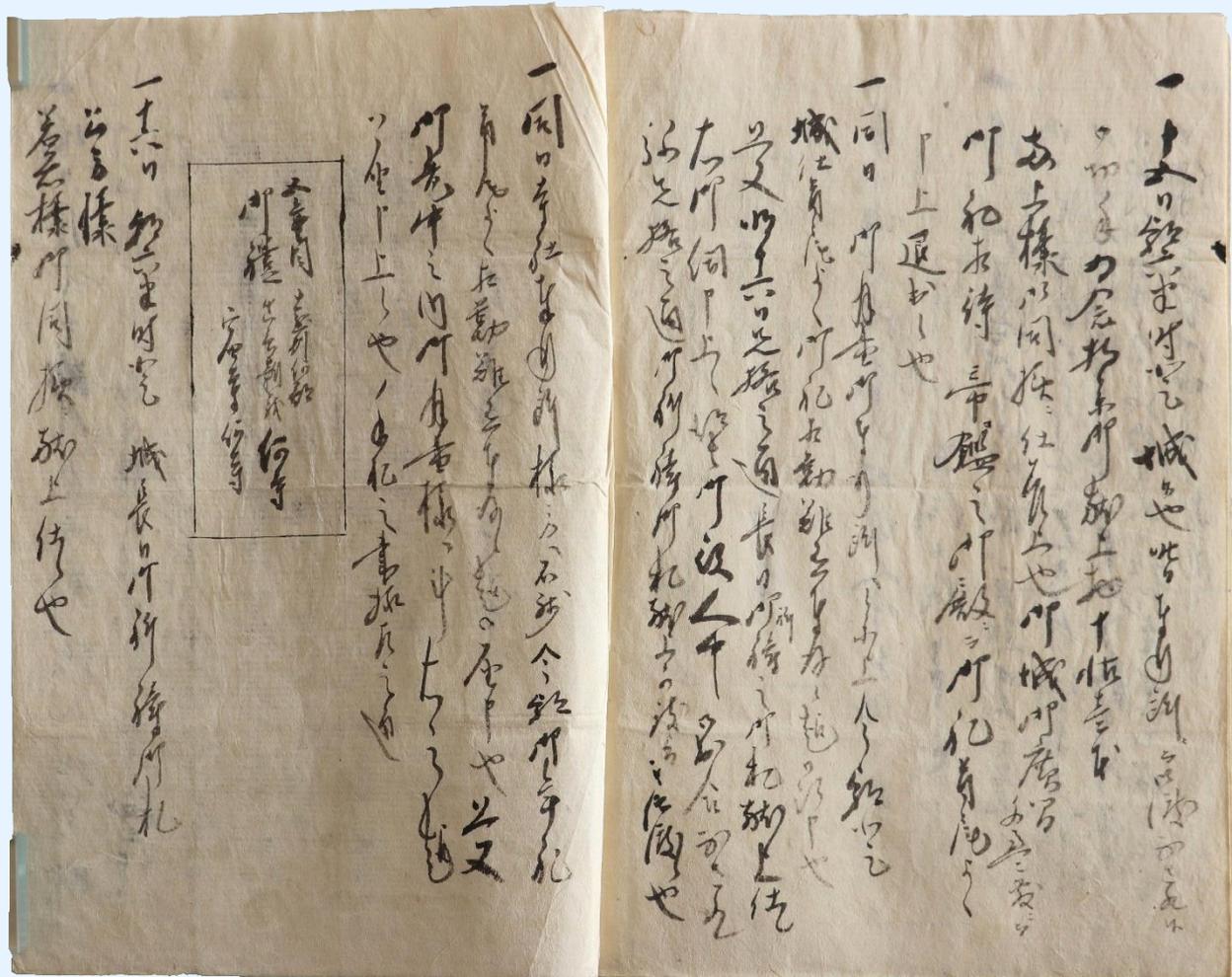
久津部陣屋への年頭の挨拶の次第は、『年中行事扣』
によれば右のとおりです。

正月には、連日どこかしらへと挨拶に行っていま
す。西楽寺住職だけではなく、塔頭の住職たちと手
分けして、方々へと挨拶回りをしていました。

ところで、右の引用文に「五ヶ年目ハ公儀御年頭
出府ニ付」とありました。正月四日には、「江戸御礼
番」のため、西楽寺住職が江戸に向かっています。

実は、五年に一度、西楽寺は、江戸城に登城して、
正月十五日に行われる年始の挨拶に参加をする必要
がありました。次に、その登城儀礼を見ていきまし
よう。

江戸城での年頭御礼 西楽寺の寺格



『年頭御礼勤番留記』（西楽寺文書近世 1380）

年頭御礼の動きをまとめたノート。必要な書類の様式やその包紙に至るまで図入りで書かれている。15日条に「一、十五日朝六半時登城也。此日奉行所^ニ御渡なされ候御切手為^レ念持参。御献上物十状壹本。両上様御同様^ニ仕、差上也。御城広間千畳敷^ニ御礼相待、帝鑑之御殿^ニ而御礼首尾よく申上退出候也」とあり、待機場所と年始の挨拶を行う部屋のことが書かれている。なお、帝鑑の間は白書院の中の一室。献上物の「十状一本」（十帖一本）とは、奉書紙十枚と扇一本を水引で束ねたもの。

江戸時代、西楽寺は、五年に一回、正月に江戸に行き、江戸城で年頭の挨拶に参加していました。

西楽寺文書では、この年頭の挨拶を「御年礼」とか「御年頭登城御礼」などと呼んでいます。本稿の地の文では「年頭御礼」と呼ぶことにします。

このような、江戸城内での儀礼を、学術用語で「殿中儀礼」と呼びます。西楽寺文書では、「登城御礼」などと呼ばれています。

西楽寺の殿中儀礼が始まった頃については、初期の史料が無いためよく分かりませんが、殿中儀礼関係の史料は、割と多く残っています。

儀礼の場では、参加者の序列が可視化されます。席次、所作、発言……それら全てが格によって厳しく定められるからです。

では、近世西楽寺の、年頭御礼の場における格（儀礼の場におけるお寺の格を「寺格」と言います）についてまとめていきましょう。

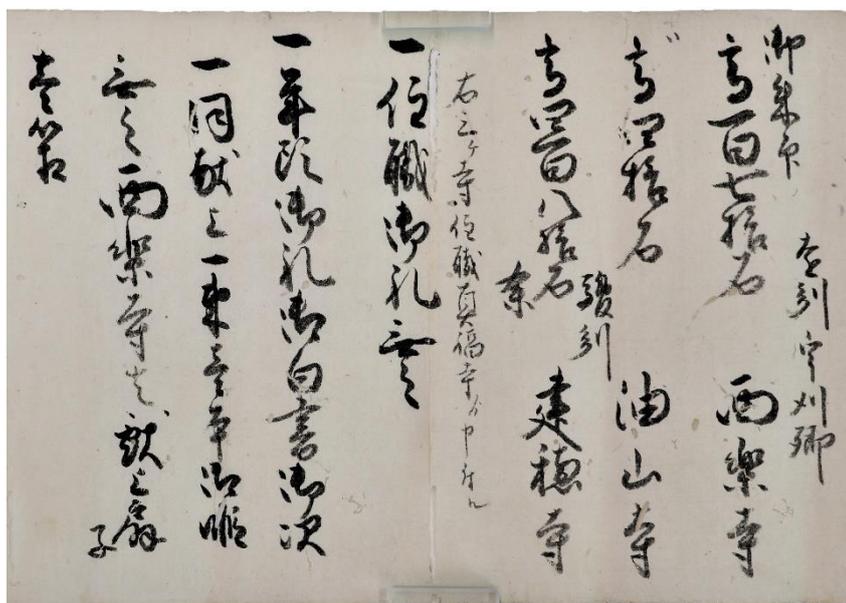
お寺の殿中儀礼に関する研究はいくつかありますが、今回は、同じ新義真言宗の田舎本寺を研究対象としている、西沢敦男氏の研究を中心に、寺社の殿中儀礼についてまとめていきます。

幕府の様々な儀式は、家綱期以降進められ、吉宗の頃までに完成したと言います。武家儀礼では、それまでほぼ同格だった大名同士の間には、儀礼の場での序列が新たに生まれてしまい、そのことにより発生した軋轢を解決するのに時間がかかった、とも言われています。

江戸幕府の寺社向けの儀礼については、慶安五年（一六五二）に、関東を中心に、寺社の殿中儀礼を伴う年頭御礼・祝儀などの参加条件（寺社の序列のこと。寺の場合「寺格」と言う）を定めました。諸国の寺社・山伏の年礼参加条件（寺格）が確定したのは、享保十六年（一七三一）のことでした。

殿中儀礼の寺格で代表的なものは、どのような形で御目見・御礼をするか、という格式と、年頭御礼のため、何年に一度参府するか、という格式です。

西楽寺の寺格や登城儀礼のスケジュールについては、袋井市歴史文化館『中遠の古刹 真言宗西楽寺



「寺格覚」（西楽寺文書近世 1213）部分（西楽寺・油山寺・建徳寺）

III 年中行事』（二〇二一年）も参照ください。

西楽寺の寺格について、西楽寺文書に「寺格覚」（西楽寺文書近世二二二三）という、そのものずばりの表題を持つ史料があります。縦 163mm×横 1765mm という、とても長い文書です。必要部分を抜き出すと左ようになります（写真は上）。

（前略）

御朱印 遠州宇都郷

高百七拾石 西楽寺

高四拾石 油山寺

高四百八拾石 建徳寺

余 駿州

右三ヶ寺住職、真福寺を申付ル。

一住職御礼無し之。

一年頭御礼、御白書御次。一同献上束巻本、御暇無し之。西楽寺者献上扇子巻箱一。

（後略）

西楽寺・油山寺・建徳寺でセットになっています。

内容は以下のとおりです。

- ① 新住職を決める時は、触頭真福寺が申しつけることになっている。
- ② 新住職が決まった時の御礼は無い。
- ③ 年頭御礼では、「白書」（白書院）が儀礼の場。
- ④ 御暇は無し。

⑤ 一同で「一束一本」（奉書一束と末広二扇一本）を水引で束ねたものを献上する、ただし、西楽寺は、扇子一箱を献上する。

④の「御暇」とは、出府した寺院が帰国前に御暇を許され、時服を拝領する儀礼です。格式が高い遠国の寺院が御暇を許されました。

献上品の品目について見ると、西楽寺は、油山寺・建徳寺とは少し様子が違うようです。

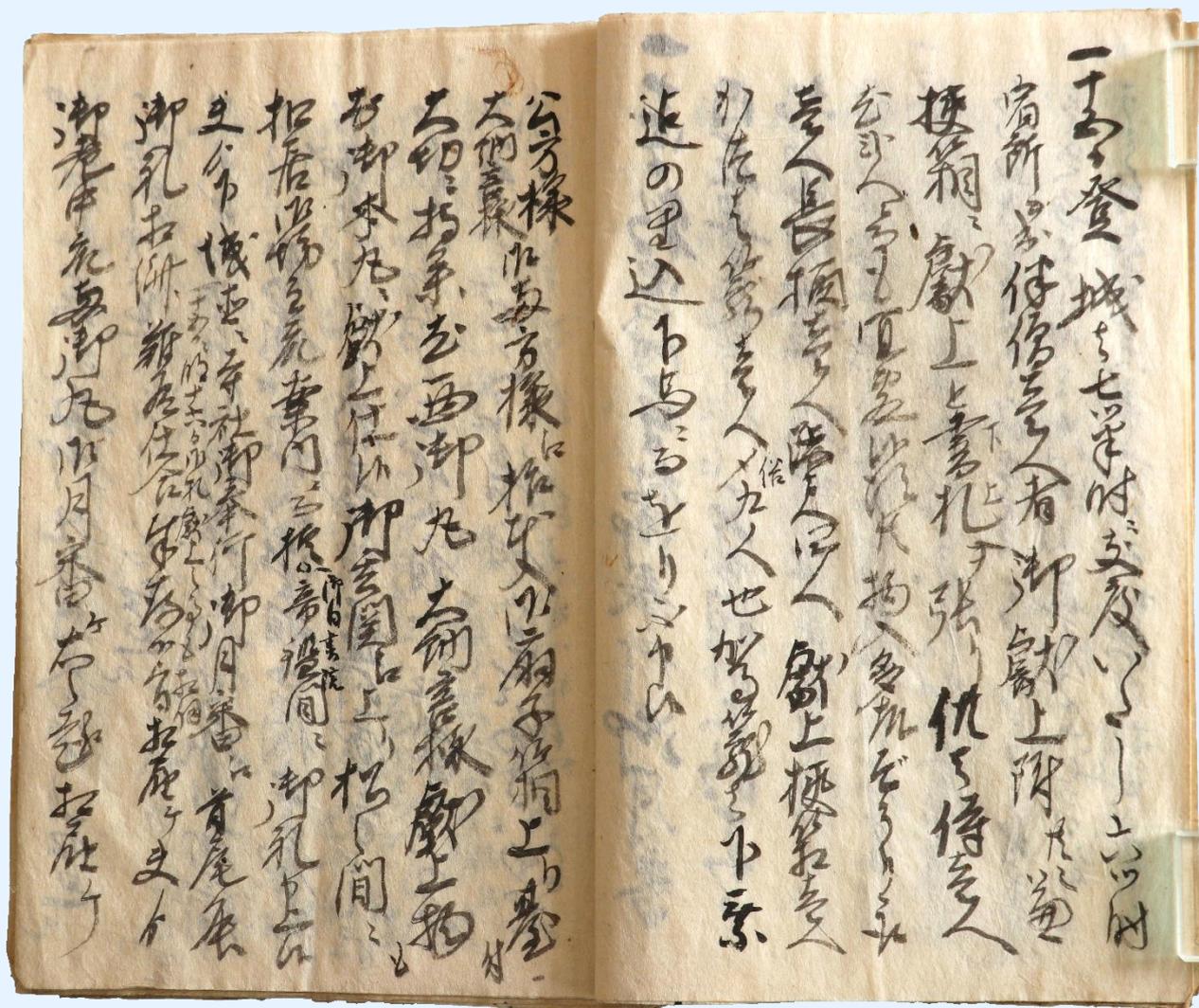
その他の要素について、他の西楽寺文書もあわせて調べたところ、西楽寺の寺格は、朱印地を五〇石以上持っている田舎本寺（地方の中心的な寺院）として妥当な格だったようです。

……あまり特殊な立ち位置でも困ってしまいますけれども。

【参考文献】

- ① 西沢淳男「寺社の將軍代替御礼と殿中儀礼——高尾山薬王院を事例として——」『日本歴史』五八八、一九九七年。
- ② 小宮木代良『江戸幕府の日記と儀礼史料』（吉川弘文館、二〇〇六年）。
- ③ 高嶋弘志「蝦夷地三か寺の殿中儀礼と寺格について」『釧路公立大学地域研究』18、釧路公立大学地域分析研究委員会、二〇〇九年。
- ④ 袋井市歴史文化館『中遠の古刹 真言宗西楽寺III 年中行事』（二〇二一年）。

江戸城での年頭御礼 登城のお供



文化12年（1815）正月付け『御年頭登城御礼日記』（西楽寺文書近世1353）

文化12年（1815）正月の年頭御礼のために登城したときの記録。
 向かって右側のページの文字起しは下に掲載。

登城の際には、お供の人々がいきました。イメージで言うところ、大名行列がぞろぞろくつついていくものの縮小版のような感じでしょうか。
 このお供の人たちについても、格式によって決まりがあったそうです。

お供の人たちの実例については、文化十二年（一八一五）正月付け『御年頭登城御礼日記』（西楽寺文書近世一三五三）に記述があります。

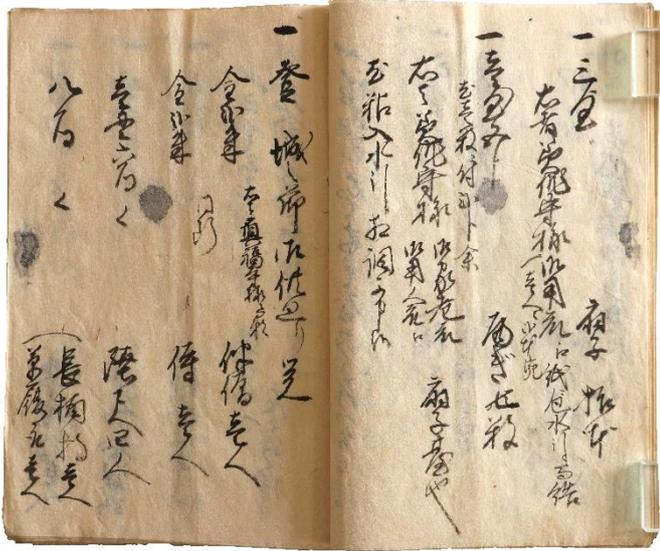
（前略）

一、十五日登 城者七ツ半時ニ仕度いたし、六ツ時宿所ヲ出。伴僧一人者御献上附共ニ兼、挟箱ニ献上と書札ヲ張り、供者侍一人。尤式人ニ而も宜敷候得共、物入多故。ぞうり取一人、長柄一人、陸尺四人、献上挟箱一人、かつは籠一人、^俗九人也。駕籠者下乗迄のり込下馬ニ而をり不レ申候。

（後略）

〔現代語訳〕

一、十五日の登城は、七ツ半時に仕度し、六ツ時に宿所を出る。伴僧一人は、献上附をも兼ねている。挟箱に「献上」と札書を張り、供は侍が一人。もつとも、二人でもいいのだが、物入りが多いので（一人にした）。草履取一人、長柄（長柄持＝傘持）一人、陸尺（雑役。駕籠かきや掃除、下男な



『御年頭登城御礼日記』(西楽寺文書近世 1353)
お供の人たちの人件費一覧

箱、侍一人、伴僧一人、陸尺三人、草履取一人、合羽籠一、だったようですから、お供の人数については、西楽寺の方が少し多かったですようです。	西沢氏が紹介している武蔵国高尾山薬王院の場合は、代替御礼(將軍の代替わりに際しての儀礼)の時の例ですが、天保十四年(一八四三)に、挟箱二・乗物・侍二人・伴僧一人・長柄・陸尺四人・草履取一人、杖・合羽籠二、とのこと。西楽寺や医王寺よりもずっと多いですね。	西沢論文を見ると、高尾山薬王院は、西楽寺よりも一段格上だったようですから、年頭御礼と代替御礼という違いはあれど、西楽寺のお供の人数との差は、右に見た通りでまず問題ないのでしょうか。	ところで、『御年頭登城御礼日記』(西楽寺文書近世一三五三)には、お供の人たちの人件費一覧が載っています。	(前略)	一、登 城之節御供廻り覚	金貳朱 右者真福寺様ニ而頼	伴僧壹人	金貳朱 同断	侍 壹人	壹貫六百分	陸尺四人	八百 分	長柄持壹人	草履取壹人	一、四百 分	挟箱持壹人	一、五百三十分	平人貳人合羽籠	一、四百 分	朝支度弁当代
---	--	--	--	------	--------------	---------------	------	--------	------	-------	------	------	-------	-------	--------	-------	---------	---------	--------	--------

ベ三貫三百三十分 近江屋
為ニ金貳分ト三十分分一 庄蔵(払)

(後略)

見ると弁当代四百分という項目もあります。

また、伴僧と侍は触頭の真福寺に頼んで付けてもらっていることが分かります。触頭は新義真言宗寺院の中で事務方のトップと考えていただければ宜しいかと思えます。四箇寺あり、それぞれに担当している寺院が多数ありました。真福寺は西楽寺を担当していた触頭です。

侍の金額を見ると、金二朱。一人あたりの金額だと、伴僧と並んで最も高いです。やはり、触頭の真福寺に頼むだけあって、伴僧と侍はお供の中でも格が高かったようです。

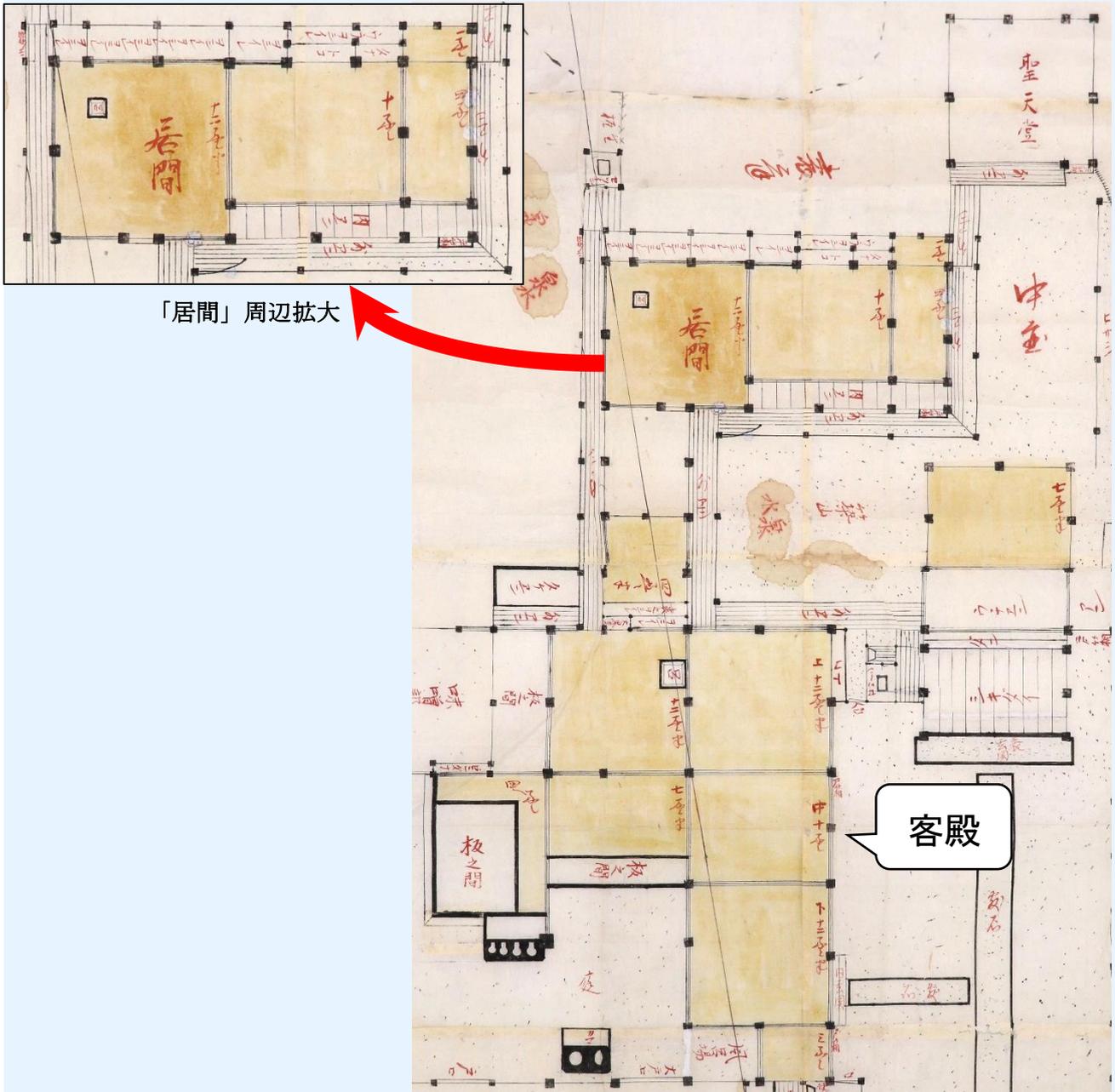
なお、四朱で一分、四分で一両ですから、金二朱は一両の八分の一となります。

江戸時代の貨幣価値と現代の貨幣価値を比べることは、私は半ば不可能だと考えているのですが、質問が割と多く来ますから、かなりポピュラーな計算の目安である、一両 \parallel 約十万円という換算で計算すると、金二朱は約一万二千五百円となります。確かに、なかなかお金がかかりますね。

【参考文献】

- ①西沢淳男「寺社の將軍代替御礼と殿中儀礼——高尾山薬王院を事例として——」『日本歴史』五八八、一九九七年。

西楽寺の東照宮



「先般有様之図」（西楽寺文書近世 3764—3）部分、北が上

江戸時代の西楽寺には、東照宮がお祀りされてきました。東照宮の法要は、徳川家康の命日である四月十七日に行われましたが、毎年お正月にも、お供えや飾り付け、読経がされていました。

江戸時代には権力者が神格化します。様々な武士、戦国大名が神様になりました。その代表が徳川家康
Ⅱ 東照宮です。

武士の神格化は、世俗権力が宗教的権力も持とうとした動き、と説明されることもあります。豊臣秀吉や徳川家康の神格化は、世俗政治権力と宗教的権力の力が複雑に絡み合い、新たな秩序をつくり出そうとした、とも言えるでしょうか。ちよつと難しいお話になるので、今回は割愛します。

神になった武士の中で、その勧請数を比べると、徳川家康（東照宮）が圧倒的の一位です。武士だけでなく、民衆からも人気がありました。家康が立ち寄った、という伝説を伴う例も多く、東照宮を遊行神と見る向きもあります。

実は、徳川幕府は、三回も全国の東照宮の調査を行っているのですが、それにもかかわらず、幕府は全国の東照宮を把握できなかったそうです。それだけ東照宮は人気でした。

さて、西楽寺の東照宮ですが、東照宮儀礼を行った記録があり、存在していたことは確かです。

調べてみると、幕府や、その後の東照宮関係者、研究者も西楽寺の東照宮の存在を把握できていなかったのです。私勧請のものが存在したのだと思います。

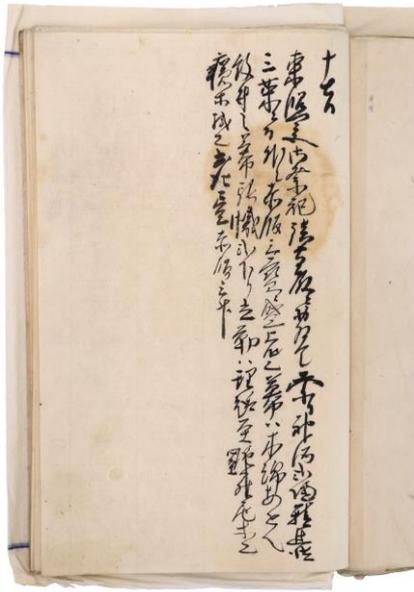
西楽寺東照宮の古い例は、一七〇〇年頃に八世住職尊昭が書いたノートです(『当山諸由緒扣』西楽寺文書近世一一)。そこには、「一、卯月十七日東照宮法要」とあります。家康の命日である四月十七日に東照宮の法要を行っていたようです。

尊昭のころにどのような東照宮法要を行っていたか、細かなことは分からないのですが、『年中行事扣』(西楽寺文書近世二六八六) 四月十七日条に、その次第が書かれていました。

十七日

東照宮御祭祀、鎮守殿ニおみて祭り。神酒式陶精進供。三菜ニ而外し赤飯三宝ニ盛上ル也。幕ハ木綿あを也。紋付之幕張幟式下リ立、勤ハ理趣經心經等也。簾等掛之出仕。昼赤飯三升。

鎮守(十所権現)でお祭りをする、とのこと。御神酒を二据えと精進供(お供え物)をお供えする。三菜と赤飯をお供えして、木綿の青い幕を張り、



『年中行事扣』4月17日条



『正月御備荘取扣帳』(西楽寺文書近世 1684)

理趣經を誦する、とのこと。

理趣經は真言密教でよく読まれた経典で、『年中行事扣』を見ると、西楽寺でもよく読まれています。

『年中行事扣』を見ると、正月十七日にも「東將軍御円日ニ付、例之通精進供差上、客殿ニ而理趣經陀羅尼誦經候」とあり、正月十七日にも、東照宮の縁日(命日)と客殿で理趣經を誦している。

同じ十七日)ということ、客殿で理趣經を誦している。四月十七日の東照宮法要は、鎮守ニ本堂前の十所権現で行われていましたが、正月十七日の法要は客殿で行われていました。では、西楽寺の東照宮は普段どこに置かれていたのでしょうか。

弘化二年(一八四五)十二月『正月御備荘取扣帳』(西楽寺文書近世一六八四)という、様々なお祈りしている神様へのお供え一覧を見ると、(前略)客殿道場荘↓歓喜天↓裏道場↓寺中本尊(後略)の順に書かれていて、この内、「裏道場」に「一、台五合 東照宮」とありました。

こうしたリストの配置は、一般的に、地図上で近い順に書いていきますから、客殿と歓喜天(聖天)

の間にある建物でしょうか。

安政東海地震の後に書かれた、安政江戸地震直前の学頭坊の図面「先般有様之図」(西楽寺文書近世三七六四一三)を見てみると、「居間」と書かれた部屋の右に二つ行った部屋の北に、不思議な区画があります。東照宮がいたのはこのあたりでしょうか？ 残念ながら、現時点の情報では、まだはっきりしたことは分かりません。

【参考文献】

- ① 曾根原理「徳川王権論と神格化問題」『歴史評論』六二九、二〇〇二年。
- ② 中野光治「諸国東照宮の歴史的考察」『史観』一五二、早稲田大学史学会、二〇〇五年。
- ③ 野村玄「徳川家光の国家構想と日光東照宮」『日本史研究』五一〇、二〇〇五年。
- ④ 野村玄「東照宮号宣下をめぐる政治過程再考」『史海』五五、二〇〇八年。
- ⑤ 高藤晴俊「全国の東照宮奉齋の諸相」『神道宗教』二四八、二〇一七年。
- ⑥ 中野光治「諸大名による東照宮勧請の歴史的考察」『神道宗教』二四八、二〇一七年。
- ⑦ 高野信治『武士神格化の研究 資料編』(吉川弘文館、二〇一八年)。
- ⑧ 野村玄『徳川家康の神格化 新たな遺言の発見』(平凡社、二〇一九年)。
- ⑨ 高野信治『神になった武士 平将門から西郷隆盛まで』(吉川弘文館、歴史文化ライブラリー五四六、二〇二二年)。

名刺の歴史は意外と重要？

年頭御礼の動きをまとめた、『年頭御礼勤番留記』

(西楽寺文書近世一三八〇)の正月十一日条に、以下のような記述があります。

一、十一日 御月番之御奉行所へ御届申上ル。

手札之趣如左。

五年目 遠州何郡何村
御 札 真言新義 何寺
宿寺 何寺

中奉書^二而
相認候也。

右之手札、御月番御奉行所御玄関へ持参、当年五年目御礼勤番^二付、参府仕候。御役人中江得^二御意 度旨申入^レ也。御役人御出合なされ、先年何之年相勤候哉御尋有^レ之候間、去何年御礼番^三其節先住相勤候。当年五年目御礼番^二御座候旨、口上書并先例書一紙^二相認差出候也。

(後略)

〔現代語訳〕

一、十一日、御月番奉行所(寺社奉行所)へ届

け出に行く。

手札は左のとおり。

(手札図略)

右の手札は、御月番奉行所の玄関へ持参。

「今年は五年目御礼勤番なので参府しました。御役人中へ御意を得たいです」と申し

入れる。御役人が出てきたら、「先年何の年に勤めたか、御尋がありましたので、去る何年に御礼番でして、その時には、先住が勤めました。今年も五年目御礼番に当ります」といった旨を、口上書と先例書一紙に書いて差し出す。

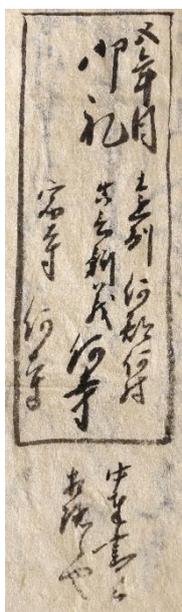
寺社奉行に願書と先例書を提出する部分です。

手札は名刺みたいなものでしょうか。「私こういう者です。西楽寺が来たとお伝えください。江戸滞在中の連絡先(≡宿寺)はここに書いてありますので」といったところかと思えます。手札図の下に「中奉書」とありますが、これは中くらいの大きさの奉書紙、ということですが。

西楽寺文書の、江戸でのお仕事の史料を見ると、こうした、「どこのこうこう言うお寺の誰それです」というカードがよく登場します。

おそらく、対応の効率化のため、こうしたカードが必要とされたのでしょう。

今回、年賀状の歴史についてもいっしょに展示し



『年頭御礼勤番留記』(西楽寺文書近世一三八〇)

正月十一日条より、「手札」部分。

ていますが、江戸時代の町家の年礼は、紋付小袖で供を連れ、年玉の品物を持って、二日より年礼廻りをする習慣でしたが、その風習が簡略化されると、玄関に年始帳を置き、年始廻りに来た使者は、年始帳に署名するだけ、というものになりました。これが、江戸から明治に移ると、名刺受けと名刺に、更に簡略化されました。

この変化が、後の年賀状につながります。

また、長溝村の、大正の頃に行われた葬儀関係史料が一括で残っていますが、そこには、参列した人の名刺がまとまって残されていました。

日本の近世—近代史(特に儀礼史)において、名刺(や名刺のような存在)は、効率化のために使われ出したのですが、それが次第に、儀礼そのものの形も変化させたのかもしれない。

そう考えると、名刺という存在は、歴史学(少なくとも文献史学)にとっては、重要な史料形態なのかもしれません。

【参考文献】

①高崎みどり「年賀状の成立に関する研究」『文学部紀要』一、文教大学、一九八七年。